

## 文章上達の順序

泉鏡花作

### 序

普通何人にも必要なのは、實用的の文章である。  
實用的の文章さへ思ふ通りに書けるやうになつたら、  
更に修辭の巧を盡す可き惻の文章を書くことは、そ  
んなに難かしいことはないと言つてもいい。初めか  
ら美文や小説などを書くよりも、思ふことをそのまゝ  
述べる實用上の文章から入つて貰ひたい。

それには日記をつけることゝ、手紙を書くことを  
お勧めする。日記は文章の習練になることは勿論、  
總ての物に注意するやうになるから觀察が細かくな  
るし、又手紙を書くのも文章の修練になるのみなら  
ず、自分の思つたことを書き現すのに非常に有益で  
ある。

## 唯眞情を吐露せよ

これは何も自分で發明した言葉ではないが「至誠人を動かす。」で、凡て文章に尊しとするところは、誠心、誠意、自己の眞情を吐露することである。殊に手紙の文にあつては、たとへ言葉は整はずとも、文章は少しぐらゐ拙くとも、もと／＼實用を主とするものであるから、その人の眞情さへ籠つて居たら差支へないと信ずる。昔から「手書きあれど文書きなし」など、云ふ諺もある通りで、成程文章は巧みに書いても、眞に手紙らしい手紙を書くことは困難である。とは云つても、畢竟は眞心を籠めずに書くから困難になるのであつて、専門家が美文を綴るのではなし、眞情さへ發露させたら十分である。自分は年來「新小説」の書翰文を受持つて居るが、この選をする上にも、主として以上の旨に則つて居るつもりである。ところが懸賞の故であるか、慣れた故か近來は美文風の投稿が非常に増して來た。自分の考へに依れば、之れは斷じて手紙の文として上乘のものではない。飾るといふのは、既に手紙の生命を没却して居るのだ。

言文一致の手紙では、以上に述べたことが殊に適切に當て嵌ると思ふ。眞心からさへすれば、文句を飾ると云ふ先に、自然と人を動かす言葉が出て來るのである。極めて好い手本は、例へば國を離れて笈を負うて東京に來た者が、夜更けて何處やらの汽笛の聲を聞きながら、頻りに懷郷の念に駆られて居るところへ、郵便！と親からの一封の手紙が來る。早速開いて讀むと、書き手は田舎の天保老爺なり、本字も碌に知らぬけれども、息子を懷ふ一心からの金釘を揮うて、「せがれや無事か、さぞ寒からう、なまけてはいかぬぞ。」云々とあつたらば何うだらう。息子にとつては親しく親の温容に接する氣がして、厚い情が身に沁むやうに見覺えるだらう。ところが國から手紙は來たが、見覺えある村一番の大先生の代筆で、さら／＼と達筆の書き流し、「一筆啓上仕候」式では、いかに文章が整つて居ても、嬉しいとも懐しいとも思はれず、よし思はれた所が極めて薄く、海山を隔てゝの感じに過ぎない道理である。されば、心の籠らぬ手紙は、順序形式抜け目がなく、首尾一貫してあらうとも、丁度使ひの者が主人の口上を承つて、先方へ馳せ參じ、機械的にす

ら／＼と述のべると同どう様やう、所いは謂ゆる、口こう上じやうを以もつて申まをし上あげ  
ます底ていの手紙てがみになつて了しまふ。それでは、手紙てがみと云いふ  
ものに、何どの床ゆかしい情じやう緒じよもなくなつて了しまふわけであ  
る。

## 座敷へは出されぬ不作法

又此處に注意を要するのは、禮儀作法の一條である。如何に字句は整はず、文章は拙くて好いと言つても、相當の禮儀と云ふものを缺いてはならぬ。よし隔てのない仲、即ち親子、夫婦、兄弟、況してや朋友の間にあつても、禮儀と言へば角が立つが、禮作法は存じて居らねばならぬ。眞情さへ吐露すれば野鄙でも差支へないとは云ふものゝ、その野鄙なる社會、例へば土方は土方、車夫は車夫の中にすら、その社會獨得の禮儀ぎ》は見受けられるので、總じて禮儀がなくなれば無作法となる、此の無作法と云ふものは、誠に御座敷へは出されぬものだ。だから言文一致の手紙の文中にも、なる可く言葉を露骨に、萬事飾らぬが上分別と云つて「オイ、コラー。」

流の無作法な言葉を缺んだとしたらば、それは一種撲訥と云ふことを殊更銜つたので、甚だ見苦しい。

で、自分は今、手紙の文體は全然言文一致でなくてはいけぬとは言はぬ。又、元々通りへ Ruby 一是非候文でありたいとも言はぬ。候文で然るべきと

ころは候文、有ります、御座りますで有る可きところ  
は、矢張り有ります御座ります、何れでも勝手だ  
又、候、御座候式と、有ります、御座ります、ませ  
う、でせう式とが一文中に混じて居ても關はぬ。友  
達同志が訪問しても、始めは左様、然らばの鹿爪ら  
しい挨拶だから、手紙で言へばそこは候文、その中  
に茶が出る、酒が出るで、世間話に碎けて行くとこ  
ろは言文一致と、先づ斯う云つた鹽梅である。(こ  
の一節二十幾行、前掲と重複す。然りも雖も、談話  
の意義を續くるため、再録して諒恕を仰ぐ。)

## 日記と季節の観念

次に日記を書くに就て先づ第一に注意せねばならぬことは、その日の出来事を順序正しく、而も細かく記すことである。その間に飾りや、嘘があつてはならぬ。日記にはそれが禁物だ。

それから、外面の出来事ばかりでなく、内部の生活、即ち、思つたこと、考へたこと、感じたこと

―― 思想生活をありのまゝに記して置くことも必要である。又、自然の風物の推移、例へば昨日まで氣が付かずに見た草原が、今朝見ると急に美しい花を開いたとか、今日初めて蟲の聲を聞くとか、或ひは又八百屋の持つて来る茄子が日に／＼細くなつて、柿を初めて店頭に見るとか云ふことを、一々細かに記して置くことは、非常に有益なことである。これは單に日記として有益なばかりではなく、一體季節の観念と云ふものは、その時々によつて變るもので、何時ごろ雪が降るものだけ、何時ごろ蝉が鳴き出すものだけ、大體のことは分つて居ても、例へば小説などを書く時に春のことを冬書く場合などに

は、その季候の様がはつきりと胸に來ないので、非常に困ることがある。その時に日記を開いて見てその當季節の觀念が頭にびつたりと來て、思ふことがすら／＼書けると云つたやうな便利がある。單に文章を書くとき云ふ上から云つても、全然ないことを書き上げるのは些つと骨が折れるけれども、その日の出來事で、未だ心に新たなことを書き付けるのは、文字を少し知つた者には別に難かしいことでもない。それからだん／＼文章を研究して行く便利もある。

## 文章としての文章

日記だとか、手紙たとか、然う云ふ實用上の文章で、略々自分の思つた通りのことが書けるやうになつたら、文章としての文章を書くのも、さして難かしいことではないやうになる。

文章を書いて居る中には、次第に文章の妙味も分つて来れば、文章の調子なども自然と出て来る。自分の言はんと欲するところを簡潔に云ひ現して、それで文章としての妙味もある。之れは何うしても多くの文章を作つた後でなければ此の境地には到達されまい。

文章を書き始めには、兎角分りもしない大家の文章を丸呑みにして、その難かしい言葉を引つ張り出して来て並べたいものである。之れは餘り褒めたことではないと思ふ。要するにそれは本當の文章と云ふものが分りもしないで、文章としての文章を書かうとするから、自然と然う云ふ弊に陥つて来るので、自分の思つたこと、感じたことを正直に書き付けて

置くと云ふ態度から文章の道に入つて來れば、然うした弊はなくて濟むと思ふ。

自分なども、初めは何うかして好い文章が作り度くて、無暗に美しさうな、難かしい文句を並べ立てたものだ。それを得意になつて紅葉先生に見て貰ふと、第一の當て場たるその美辭佳句を並べ立てたところは、遠慮會釋もなく眞赤に消されて、思つたことを正直に、そして、平易に書けと言つて教へられた。

と云つて、大家先輩の文章を讀んだり覺えたりするのが悪いと云ふではない。言葉を多く知ると云ふ點から云つても、又思想を豊富にすると云ふ點から云つても、先輩の書物を読み、それを記憶して行くことは、文章を作る者の心掛けねばならぬ肝要のことであることは云ふまでもない。たゞ、その言葉なり、文句なりを十分呑み込みもしないで、調子が好かつたり、耳ざはりが好いと、直ぐにそれを使用すると云ふやうな態度が好くないのだ。その言葉の味ひを十分に消化して、それが自然に自分の文章の中

に流れ出ると云ふのは、決して悪いことではない。

添刪と云ふことも文章の初歩の人には非常に有益なことであるが、少しく筆の廻るやうになつた人は、直接自分より進んだ人に遇つて、此處が悪いとか、彼處が好いとか云ふ批評を聞いて、それに依つて自分の考へで添刪して行く方が、却つて有益である。

要するに文章と云ふものは、或る程度までは、教へたり、導いたりして上達させることが出来るものであるが、それ以上は月らの努力にある。即ち、書いたり、直したり、自分で數を重ねて苦しんで、始めて眞の文章の妙味を會得し、それを書くことが出来るやうになるのであらう。(談。)

【完】